

空手道詳説（42）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（2）空手と沖縄の言語

ア 空手と沖縄語

1) 形（型）の名称考と沖縄訛り

形を記すにあたり型の字を括弧書きで併記したのは、今は中央競技団体の公益財団法人全日本空手道連盟が制定する「空手競技規定」は「形」の字で統一されているが、以前は「型」の字を使用していた。「空手競技規定」が「型」から「形」に変わったのは平成7年度（1995年度）からである。

以前の空手界では、和道系などの一部を除いて、空手発祥の地である沖縄県を含め「型」の字を用いるのが一般的であった。

【補注：沖縄県でも長嶺将真氏（1907～97年）は、その著書で「形」の字を用いているから、必ずしも「型」表記だけに限定されていたわけではない。】

この「形」か「型」かの文字問題は、空手道の場合はどちらを正字とするか安易に論じられない経過と背景がある。

そもそも空手道の形（型）は中国の北派少林拳と南派少林拳に由来するもの多いが、琉球（沖縄）で何時の時代から修錬法として形が導入されたのか、その時期ど内容の詳細は未だ確たる調査結果が出ていない。

中国では、武術の形を「套路」と呼ぶ。「套」は「重ねる」「覆う」「真似する」「定まったとおりの」の意味で、「路」の類語は「道」であり「たどる筋道」「やり方」となるから、套路から受けるイメージなら「型」の方が近いかと思う。しかし、本土における武道界では、古い時代から形で通しているから、「型」か「形」かの問題は後の「空手道と形」の項で考察したい。

中国拳法との関係で歴史上に登場する人物として、トーデ（唐手）佐久川と呼ばれた佐久川寛賀（1786～1867年とする）がいる。佐久川は、琉球古来の手（ティー）

を学んだ後、北京留学の傍ら中国拳法（北派少林拳）と棒術を身に着け、帰国後それを伝授したので、名にトーデ（唐手）を冠して呼ばれたが、その実態はよく分かっていない。現在も「佐久川の棍（サクガーマクン）」という棒術の形があるそうだが、トーデ佐久川が残したものかどうか疑問視されている。

トーデ佐久川は、確かに中国拳法の使い手、導入者として名を残し、門人には著名な松村宗棍を始めとする人たちがいたというが、これも諸説あって定かでない。

【参考：沖縄県教育委員会文化課編「空手道・古武道基本調査報告書—Ⅱ」（平成7年3月第一刷、榕樹社発行）の3頁には、『松村は幼少の頃から、唐手佐久川に武術を師事し・・・』とあり、一方で長嶺将真著「沖縄の空手・角力名人伝」（昭和61年6月10日初版、(株)新報出版発行）43頁には、『松村宗棍の「手」の師匠は定かでない』とある。このように、資料によって異なる表現がある。】

その後、琉球では北派少林拳のみならず、距離的に近く大陸への上陸地となっていた福建省の南派少林拳を修得して帰国する人たちがいた。

【補注：時期的に早かったのは仲井間憲里（1819～79年）で、彼は1839年に福州に留学し、劉龍公（ルールーコウ）という師について武術を修得し、帰って劉衛流を名乗るが劉衛流は一子相伝で保存され、戦後も暫く過ぎるまで世に出なかった。】

また、琉球で古来より伝承されてきたとされる「手」（ティー）と呼ばれた徒手空拳の武術は、習練手段として「形」があったかどうか証明できていないので、ここまで述べてきた諸々に関する解明は、今後の研究を待たなければならない。

随所に、「分からない」「定かでない」「証明できない」などと記した理由として、ティーも中国伝来の武術も極秘裏に然も口外無用で伝授されてきたことと、加えて先の大戦で激戦地となった「沖縄戦」で、幾多の記録や資料が焼失したのも大きく影響している。

形には当然名称が付されたが、その名の発音が琉球（沖縄）訛りとなって定着したと思われるケースが多い。これらに関して、太極武道館館長の他多くの地位にあって、若年より中国はもとより台湾、香港の他各地に残る武術を取材研究してきた金城昭男氏（1936年～）の著書「空手伝真録～伝来史と源流型」（初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行）から幾つの形を選んで引用し、形の源流から伝来までの由来を探ってみようと思う。この項では、以後著書と同じ「型」の字を用いる。

なお、金城氏から許可を得ないまま引用したこと失礼に当たるが、この場を借りてお許し下さるようお願い致します。

引用文献を基に記述するが、初めに第V章225頁の「型名称原語考」によれば次である。

中国拳法の型を正確な文字で表しているのは、「三戦」と十三歩、十八歩、二十四歩、三十六歩、五十四歩、壹百零八歩などの数字で表現した名称ぐらいで、残りの四

十余の型名称は、沖縄訛によって正しい発音が失われていたり、当て字の漢字を使用している。「三戦」をサンチンと読むのは、福建省福州方言。

なお、金城氏は型の成り立ちは、動物が獲物を狙うところや身を守るため敵と闘争する諸作から、その特徴をヒントとして武技が考案されたものが非常に多く、架空の動物を含めて型名に反映されているという。

以下は、福州語発音、泉州語、北京語読みなどを基にした金城氏の「空手伝真録」から要約して参考に供す。

ただ伝来に関し例外的なものに、クーシャンクー（クーサンクー）やワンシュウのように、実在した冊封使が伝えたという口碑が残り、その人の名が付く型もあるので後に触れる。

この項では、技法の中身には言及しないで、名称に関するところに止める。

◎ 数字で表された型名

- ・ サンチン（三戦）・・・三戦をサンチンと読むのは福建武術独特なもので、他の地方の武術用語には見られない。この三の字は一と二の合字で天地人の道を表し、三以上は多数の意となる。例えば、「三三五五」「三戦三送」「再三」などである。

これらから、三戦は繰り返し日に幾度も鍛錬せねばならないことを意味している。流派によって一種のみあるものと、五種や六種の三戦を修練させているところもある。また、少林三戦以外は貫手の指先で突くのがほとんどで、剛柔流空手の三戦は、沖縄に伝来した後に握拳（握った拳）となった。

- ・ セイサン・・・十三歩（セイサンブー）である。十三は北京語でシーサン、福州語でセイサン、閩南語（びんなんご）でツアッサン、広東語でサアッサンという。これらから沖縄空手のセイサン（十三歩）の型は福州地方の拳法が伝来したことを物語っている。しかし、十三歩の本当の原点は福州ではなく、同じ福建省永春県の白鶴拳に発生源がある。

【参考：同様に数字の付く型にセイパイ（十八歩）、二一セーシー（二十四歩）、サンセールー（三十六歩）、ウーセーシー（五十四歩）、スーパーリンペー（一百零八歩）とあるが、全部は取り上げなかった。これらは、セイサン（十三歩）と二一パイポー（二十八歩）を除けば、3で割り切れる数字であり、仏教との関係が指摘されそうだが、筆者は詳しく説明できないので、いずれ勉強しておきたいと思う。

金城氏は、二一パイポー（二十八歩）について言及していなかった。但し、「白鶴」という項で、「白鶴」は福州語の発音で「パイポー」といい、劉衛流にも同名の型があると書いている。「空手伝真録」の「白鶴」のところに金城氏の写真

(260 頁) があって、片足立ちで鶴の両翼を広げた構えから想像するに、筆者は二一パイポーとの関連性を感じた。とすると、二一パイポーは数字の二十八ではなく、何等かの理由で頭に「二一」の語が付いた可能性もあるやに思う。「白鶴」所縁の永春白鶴拳は、著名な門派である。同じく数字の付くスーパーリンペー(一百零八歩) については後に述べる。】

(この項、つづく)

参考文献等 (発行年月は著書に記載のまま)

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 長嶺将真著「沖縄の空手・角力名人伝」、昭和61年6月10日初版、(株)新報出版発行
- ・ 沖縄県教育委員会文化課編「空手道・古武道基本調査報告書—II」(平成7年3月第一刷、榕樹社発行)